安土桃山時代の名作「柳鷺図」目貫
ー躰阿弥永勝の作品では？ー

伊藤三平

この無銘の「柳鷺図」（鷺に柳・水流を配す）の金無垢目貫は日本美術刀剣保存協会の証書では「古金工」に極められているが、『特別展　金工　美濃彫』（岐阜市歴史博物館）の図録には「古美濃」の作品として所載されている。この小論では斯界では知られていない資料も紹介して、この作品は安土桃山時代の名工　躰阿弥永勝の作品ではないかと推論している。

＜目貫の裏…陰陽根になっている＞

1．同作者の作品と思われる目貫

『特別展　金工　美濃彫』の図録には、この目貫の前に「木菟図目貫」と「柳に燕図目貫」が所載されている。同じ目貫は『金工美濃彫』（小窪健一著）にも所載されているので写真は、そちらからの転載である。

木菟図目貫

柳に燕図目貫

これら3つの金無垢目貫は①陰陽根、②金無垢だが後藤家作品より銀が多い地金（「柳鷺図」以外は私自身が確認していないが「木菟図」は『金工美濃彫』の作品評に〝銀割り〟という言葉で解説している）、③彫口が鮮やかで巧み、④障壁画に見るような、装飾的な枝振りの木に鳥が止まっている図取りが共通していることから同作者（同工房）の作品と考えられる。

安土桃山時代に絵画では狩野永徳に対抗して長谷川等伯が出たが、金工でも後藤光乗に拮抗する名工が出現していても不思議はない。

隔月刊「刀和」第405号　令和6年7月1日発行（隔月1回1日発行）

2. 古い時代の金工に関する資料

後藤家の古い時代の作品も無銘であるが、後藤家は刀剣における本阿弥家と同様に金工作品の鑑定（折紙発行、極銘入れ）に携わり、自家の先祖の作品を極めている。刀剣鑑定の本阿弥家と異なるのは、自家の作品だけを「家彫」と称して折紙を発行し、極銘を入れている点である。後藤家以外の作品は「町彫」と称して対象外である。

そうした状況下であるが、各種資料には次のような古い時代の金工名・流派名が挙げられている。活躍時代が古いと思われる順に列挙する（括弧内に出典資料名）。

・市川彦助…祐乗より前、鏨三本で彫物を造る（『装剣奇賞』稲葉通龍著、天明元年）。

（注）京都で江戸時代後期に活躍した大月派金工は「日本彫物元祖　市川彦助十八世孫　大月光林（花押）」などの銘を切ったものを残している。

・市原物…市原は祐乗彫物の師なり（「刀装・刀装具初学教室（119）」福士繁雄著「刀剣美術」568号に町の伝書からとして）

・三原物…祐乗当時（『日本装剣金工史』桑原羊次郎著、昭和十六年）。

・後藤庄兵衛…宗乗の子で上手（『後藤家彫亀鑑』後藤庄兵衛直伝を後世まとめた本、私の写本には寛延元年十二月　正誠写と奥書あり）。

・佐々木庄兵衛…後藤庄兵衛と同時代（『後藤家彫亀鑑』）。

（注）『金工事典』（若山泡沫著）によると、後藤庄兵衛は宗乗の子以外に、寛永頃にもいるとされる。そして佐々木庄兵衛は後藤勘兵衛家の下地職で京都住で寛文頃とある。

・三郎兵衛…佐々木庄兵衛と同時代（『後藤家彫亀鑑』）。

・山椒与右衛門…乗真時代、町彫の上手、山椒ばかりを彫る（『後藤家彫亀鑑』）。

・山口彫…乗真時代（『日本装剣金工史』）

・山下彫…乗真時代（『日本装剣金工史』）

・菱後藤…光乗時代（『日本装剣金工史』）

これら作者と結び付けられる明確な作品は無いが、私は「山椒与右衛門」の彫った山椒目貫ではないかと思った古雅で上手な山銅の作品を観ている。

ちなみに「古美濃」と言う流派分類はこれらの伝書にはなく、『装剣奇賞』における「光伸」の説明に「世にこれを美濃彫といい、或いは美濃後藤などとも称すること、詳ならず、但し元祖祐乗此の国の産なれば、もしくはその後胄（子孫）などの支流にや知るべからず、今美濃彫というは商家より言い出せしなるべし」（注．現代仮名使いにして読みやすくしている）とあり、江戸時代中期の美濃住の光暁、光政、光伸が主に秋野の景色を深彫した作風を美濃彫と称したことが記されている。その後、同様な作風で室町・桃山期と遡ると思われる作品を昭和30年代半ば頃から古美濃と呼んだのである。「古美濃」作品を広く知らしめた小窪氏は『金工美濃彫』の中で「その製作地は美濃に限定されるものではなく、京都、堺、奈良、美濃などの当時の文化圏で作られたものである」と記している。

3. 刀装具界では知られていない刀装金工の資料

（1）ルイス・フロイスの『日本史』に登場する名工

ポルトガルのイエズス会宣教師ルイス・フロイスは31歳の永禄3（1565）年に肥前国に上陸して布教に携わり、織田信長にも信頼される。語学と文筆の才に恵まれ、天正11（1583）年から総長の命で、布教活動を離れて日本におけるイエズス会の活動記録を残すことに専念し、65歳の慶長2（1597）年に長崎で亡くなる。その著作の一つが『日本史』（1549年のザビエルの来日から1593年まで記録）であり、布教実績を重視するきらいはあるが、当時の日本を知る貴重な記録である。

『完訳フロイス日本史3　織田信長篇Ⅲ』（ルイス・フロイス著松田毅一・川崎桃太訳）の第48章（第二部二十六章）に次の記載がある。

「そこ（安土）に集まってくる各地の多くの兵士や武将らもキリシタンになった。本年（天正8（1580）年）、三十名近い当市の者が受洗したが、その中には、日本でもっとも腕利きの信長お抱えの金銀細工師が一名い

た。また彼の太刀を作り、修理する職人もいた。この両名はきわめて善良なキリシタンで、我らの修道院のもっとも親しい人たちである。」

ちなみに文中の〝信長の太刀を作り、修理する職人〟とは研師で名高い竹屋出身の竹屋コスメのことと推測する。『日本刀大百科事典』（福永酔剣著）から、人となりを紹介すると以下の通りである。「京都の研師。キリスト教の日本二十六聖人の一人。慶長元年（1596）12月、切支丹の故をもって逮捕され、耳削ぎのうえ、京都市中を引き回したのち、長崎へ護送された。翌年（1597）2月5日、西坂において十字架にかけられ、磔刑に処せられた。」

（2）『『信長公記』に登場する安土城金具製作に携わった金工

フロイスが記した〝日本でもっとも腕利きの信長お抱えの金銀細工師〟だが、後藤光乗、徳乗は熱心な日蓮宗の信者であり、別の人物と考えられる。

『訳注　信長公記』（太田牛一著、坂口善保訳注）

「巻九　天正四年丙子（1576）安土山天守普請の次第」の項目に次ぎの記述がある。「（前略）一番上の階の金具は後藤平四郎（光乗）が製作した。京衆や田舎衆がそれを手助けしたのである。二階から上は京の躰阿弥永勝の金具である。大工棟梁は岡部又右衛門、塗師頭は刑部、銀屋の大工頭は宮西遊左衛門、瓦製造は唐人の一観に命じ、奈良衆が焼いた。普請奉行は木村高重。」

すなわち、この記述からフロイスが記した〝日本でもっとも腕利きの信長お抱えの金銀細工師〟でキリスト教に改宗したのは躰阿弥永勝と考えられる。ちなみに殉教した日本二十六聖人の中には躰阿弥永勝と思われる人物名はない。

（3）錺師 躰阿弥家の刀剣金具

躰阿弥家は、京都の錺師（寺院の屋根飾や、仏壇・仏具の装飾金具、城郭の各部屋の釘隠しなどを製作）として高名である。近年では「産経新聞　京都版2019・12・15」において、北野天満宮の西廻廊（秀吉の子秀頼によって慶長12（1607）年建立）の修理過程で、屋根の破風に取り付けられた飾り金具の裏面に「丸太町高倉東江入　錺師躰阿弥吉兵衛」の作者名が発見されたと報じられている。

『日本刀大百科事典』（福永酔剣著）でも「躰阿弥」の項立てで「京都の錺師。四代将軍家綱が京都の八坂神社へ奉納した太刀三振り（旧国宝）の銘に、「出羽大掾藤原国路　金具御大工躰阿弥　祇園社御太刀　承応三甲午年九月吉日」とある。御大工とは飾師の棟梁という意味。躰阿弥家は、延宝（1673）ごろまでは京都居住。元禄（1688）ごろは江戸へ移住。子孫は幕府の御飾棟梁として百石をもらい、幕末まで続いた。伊勢神宮の遷宮のさい、御船代、つまり神鏡をおく船型の台も、躰阿弥家が作っていた。」と掲載されている。

祇園社に奉納された国路の銘に記された刀剣に付随する金具が鎺などであり、目貫、鐔などの刀装具とは違うと考える人もいると思うが、安土桃山時代の埋忠明寿も埋忠鎺とは別に鐔の名品を残している。すなわち、躰阿弥永勝にも刀装具が存在すると考えたい。江戸時代の厳しいキリスト教禁教下では躰阿弥家の子孫にとって名工永勝の名はタブーになって忘れられていったのではなかろうか。

4. 躰阿弥永勝の作品ではなかろうか

文頭で紹介した「柳鷺図」「木菟図」「柳に燕図」の上手な金無垢目貫こそが、躰阿弥永勝の作品ではなかろうか。この時代は後藤光乗でも無銘が大半である。陰陽根は後藤家でも光乗以前が中心である。銀が強いが金無垢であり、上層武士が身に付けるのにふさわしい作品として、彼らの需要に応えたものである。図柄は城の障壁画風であり、城郭金具を任された永勝の作品にふさわしい。ちなみに『金工美濃彫』で小窪氏は「柳に燕図目貫」の評として「優雅な構図である。桃山時代の釘かくしに、同じような構図がよく使われている。桃山の雰囲気がよくあらわれている。」と記している。